

# 米国における日本研究の一断面

アジア研究学会とハーバード東アジア協会の研究集会に参加して

五十嵐 仁

---

はじめに

- 1 アジア研究学会への参加
- 2 ハーバード東アジア協会の研究集会への参加

むすび

はじめに

今回、私はシカゴで開かれたアジア研究学会 (Association for Asian Studies, AAS) の2001年年次集会と、ハーバード大学で開かれたハーバード東アジア協会 (Harvard East Asia Society, HEAS) の第4回大学院生年次大会に参加する機会を得ました。前者は3月22日から25日までシカゴのシェラトン・ホテルで、後者は4月7日にハーバード大学のクーリッジ・ホールで開かれたものです。この二つの研究集会に参加することによって得られた知見の一端を、私の体験や感想を交えて紹介しようというのが、本稿の目的です。

この二つの研究集会は関連していますし、私や私と共に両方に参加した同じ客員研究員のT先生のように共通して参加する人もいますが、基本的には性格の異なるものです。その違いは、前者は、第1に米国だけでなく諸外国から参加者を集めており、第2に南アジアや東南アジアを含むアジア全体を対象にしており、第3に大学院生を含む全ての研究者が参加するという点です。

これに対して、後者は、米国内の東アジアについて研究する大学院生を主たる対象にしたもので、それ以外の参加者は「guest」として扱われます。したがって、私もゲストです。なお、ここで、「東アジア」というのは、具体的には、日本・韓国・中国・台湾を意味しています。

ということで、後者の参加者は限られており、その規模もずっと小さなものです。しかし、ゲストである私にとっても、これから専門研究者の道を目指す若手の研究者がどのようなテーマに関心を持ち、どのような研究をしているのか、その概要を知る上で大変役に立つものでした。この集会についても、あわせて紹介させていただくことにします。

また、この二つの研究集会は、一方はアジア研究、他方は東アジア研究ということで、その守備範囲は日本だけではない、広い範囲を含んでいます。しかし、私の参加した分科会は日本関係を主

たるものとしておりますし、それ以外の地域やテーマについて論評する力もありません。したがって、今回のレポートでは、日本及びそれに関連して私が出席した分科会についての紹介を中心にさせていただきます。

## 1 アジア研究学会への参加

### 厳しいスケジュール

アジア研究学会は、主として米国の研究者を対象にしていますが、しかし参加資格をそれだけに限らない国際学会です。年次集会は毎年春に開かれているようで、2001年の集会はシカゴのシェルトン・ホテルで開催されました。

今回の学会は私が参加した初めての国際学会でしたが、国外での学会がこんなにハードなスケジュールによって開催されているとは知りませんでした。私は、日本では社会政策学会と政治学会の大会に出席していますが、それらとは比べものにならないくらいのハードさです。

初日の3月22日（木）は、夜の7時から9時までが最初のセッションです。夜の7時から研究会を開くというこの感覚が、私には信じられませんでした。しかしこれは、会場がホテルで、参加者は基本的にここに同宿することを前提にしているからでしょう。翌日のレセプションも夜11時など遅くまで開かれていましたが、これも同じ理由からでしょう。大学などが会場では、とてもこうはいきません。

2日目の23日（金）は、セッションが朝の8時半から始まり、レセプションなど全ての日程が終わったのは午後11時でした。しかも、大会関係者の運営委員会や各種の会議は早朝の7時から始まっています。セッションのない時もラウンド・テーブルやパネルなどが開かれており、関係者や関心のある人はそちらに参加しています。

私たちは、基本的にはセッションだけに参加し、ラウンドテーブルやパネルなどには顔を出しませんでした。セッションは、朝8時半から10時半まで、10時45分から12時45分、1時から3時、3時15分から5時15分までと、2時間ずつ4コマ続きます。

驚いたことに、昼食をとるお昼休みの時間は、特には設けられていません。普通の休憩時間15分だけです。適当に時間を見つけて食事をしなさいということなのでしょう。これもホテル内の食堂で適当に食事を摂れるから、可能になることなのでしょう。

後でこのことについて話題になったとき、以前はやはり食事時間を設けており、なくなったのは最近のことなのだそうです。その理由は、発表申し込みが増え、セッションの数が増大し、日程が込んできたからだと言います。報告が多くなって、食事の時間をとる余裕がなくなってきたというわけです。

夕方のセッションが終わった後、7時から全体の懇親パーティー、さらに9時からハーバード大学出版会のレセプションが続きました。同じ時間にもう一つのレセプションがあり、招待状もいただいたのですが、出られませんでした。

24日（土）も、朝の8時半からセッションが始まりました。二日続けて7時起床、8時出発です。前日とは違って、昼の1時から2時45分までスペシャル・イベントでセッションはありません。

この間に昼食に出て、ついでに近くを散歩しました。その後、学会に戻り、午後2時45分から4時45分、5時から7時まで、2コマのセッションに参加しました。

最終日である25日（日）のセッションは午前中までですので、2コマ4時間で終わりです。これらのセッションは、1コマ2時間で3～4人が報告し、それに討論者がつきます。報告の時間は一人20分で、長くても30分くらいでしょうか。討論者のコメントの時間もそれくらいです。討論時間は全くない場合もありますし、40分ほどある場合もあります。全ては報告者の数と報告時間の長さによります。報告者4人は多すぎるような気がしますし、20分は短かすぎるような気がしますが、こちらではこれが普通なのでしょう。

私はこれらのセッションの全てに出ました。この4日間のセッションを全てあわせると、木曜日1コマ、金曜日4コマ、土曜日4コマ、日曜日2コマの合計11コマ22時間になります。聞いた報告は約40本、コメント約10本です。すごい数です。

でもこれは、今回の学会のほんの一部にすぎません。今回のアジア研究学会には、米国全土及びアジア各国から約3000人の研究者が集まり、220コマのセッションが準備されました。報告者は700～800人くらいということになるでしょうか。

### 私の参加したセッション

このように、私は4日間であわせて11のセッションに参加しました。私が参加したセッションは、主として政治・経済・社会関係で、これに歴史関係が若干です。その主なセッションの論題と報告者、司会、討論者を以下に掲げておきます。

11, Dissecting the Political Right in Postwar Japan (with an Examination of the Left-Right Paradigm Itself)

Chaired by Andrew Gordon, Harvard University

Postwar Tenko : Transcending the Left-Right Paradigm

Rikki Kersten, Sydney University

When Right is Wrong : Does the French Revolutionary Idea of “ Right vs. Left ” Distort our Understanding of Japanese Politics? The Example of the Postwar Kyoto School

David Williams, University of Sheffield

The Far Right and Democratic Lobbying : The Case of the Association of Shinto Shrines

Ken Ruoff, Portland State University

Discussant : Andrew Gordon, Harvard University

26, Taking Democracy Seriously : The Role of Political Parties in Southern Asia

Chaired by Allen Hicken, University of California, San Diego

Democracy and Social Welfare in Thailand

Erik Kuhonta, Princeton University

Presidential Connection : Parties and Party Systems in the Philippines

Yuko Kasuya, University of California, San Diego

The Role of Political Parties in Building Effective Institutions : Indonesia in 1955 and 1999

Kimberly Niles, University of Colorado, Boulder

Discussant : Donald K. Emmerson, Stanford University

54 , The U.S. and Japan in Asia : Developing Multilateral “ Governance ”

Chaired by Ellis Krauss, University of California, San Diego

Cooperative Competition or Competitive Cooperation? : U.S.-Japanese Interaction in Asian  
Financial Crisis Management, 1997-2000

Saori N. Katada, University of Southern California

The U.S. and Japan in APEC's EVSL Negotiations : Agriculture, Bilateralism, and Regional  
Multilateralism

Ellis Krauss, University of California, San Diego

Japanese Foreign Policymaking toward the ARF : The Emergence of an Asia-Pacific Multilateral  
Security Institution and U.S.-Japan Relations

Kuniko Ashizawa, Fletcher School of Law and Diplomacy

Multilateral Governance and Japan's New Regional Grand Vision : Policies Toward APEC and  
ARF

Andrew Oros, Colombia University

Discussant : David Arase, Pomona College

66 , Asian Regionalism : The Economics of Competition and Cooperation

Chaired by T. J. Pempel, University of Washington

Regional Power Networks : Implications of the Disk Drive Industry

Richard F. Doner, Emory University

Positional Power in Asia : How Japanese Machine Manufacturers Gained the Upper Hand in a  
Regional Contest with U.S. Rivals

Walter Hatch, University of Washington

Remapping Asia : Competing Networks of Regionalism

T. J. Pempel, University of Washington

Japanese FDI after the Asian Crisis : Leveraging Networks and Clusters

Dennis S. Tachiki, Fujitsu Research Institute

Discussant : Peter Katzenstein, Cornell University

117 , He Said, She Said, They Said : How Questions of Identity Shape the Political Process in Japan

Chaired by Peng Er Lam, National University of Singapore

U.S. Bases in Okinawa and the Problem of Local Memories in the Age of Globalization

Masamichi S. Inoue, University of Kentucky

Ordinary Political Masculinity : How Ethics of Manhood Constrain the Political Participation of Japanese Men

Robin LeBlanc, Washington & Lee University

Issue Voting in House of Representatives Elections, 1972-1996

Gill Steel, University of Chicago

131 , Politics of Gender, Sexuality, and Resistance Discourses-Korea and Okinawa

Chaired by Mire Koikari, University of Hawaii, Manoa

Asian Women Under US Military Colonialism : Military Violence and the Militarized Economy

Yoko Fukumura, University of California, Santa Cruz

Okinawa Women Act Against Military Violence : Defining Community Development Through Political Activism

Martha Matsuoka, University of California, Los Angeles

Gender Representations and the Construction of Okinawa Masculinity in Oshiro Tatsuhiro's Cocktail Party

Kyle Ikeda, University of Hawaii, Manoa

Embodying Han : Nationalism and Resistance in *Lost Names* and *Comfort Woman*

Heather A. Bohannon, University of Hawaii

Discussant : Mire Koikari, University of Hawaii, Manoa

160 , Contemporary Japanese Nationalism

Chaired by Charles W. Nuckkolls, University of Alabama

“ Perverse Masochism ” and Japan's History Curriculum : The Movement to Promote Correct History and “ Love of Nation ” in Contemporary Japan

John K. Nelson, University of San Francisco

Rehabilitating Hideki Tojo

Charles W. Nuckkolls, University of Alabama

The Showa Hall and Conservative Reactionism in Contemporary Japan

Franziska Seraphim, Columbia University

The Second Wave of Japanese Neo-Nationalism

Noriyuki Katagiri, Columbia University

180, Intersection of Socio-Political Constructs and Science and Technology Policy in Modern Japan

Chaired by William M. Tsutsui, University of Kansas

Silk as Civilization : Tomioka Filature and the Socio-Political Construction of Technological Choice

David Wittner, Utica College

Globalizing Japanese Eugenics : Taiwan, Brazil, and the International Federation of Eugenics Organizations

Sumiko Otsubo, Creighton University

Organizing for War : Group Identity, Science Policy, and the Mobilization of Scientific Research in World War Japan

Walter E. Grunden, Bowling Green State University

Discussant : William M. Tsutsui, University of Kansas

199 , Access, Cases, Theory : Rethinking Japanese Organizations from an Anthropological Perspective

Chaired by Mitchell W. Sedgwick, Cambridge University

The Informalities of Maintaining “ Institutional Face ” in Japanese Universities

Brian J. Mcveigh, Tôyô Gakuen University

Hierarchies, Networks, Markets and Frames : Reconsidering Japanese Organizations

Brian Moeran, Danish Institute for Advanced Studied in the Humanities

The Unwaged Organization : Citizens' Movements, Extra-Domestic Networking, and Social Identity Formation among Japanese Women

Okpyo Moon, Academy of Korean Studies

The Japanese Organization and the individual : Exploring “ The Generation Gap ”

Gordon Mathews, Chinese University of Hong Kong

212 , Punishment, Welfare, and Sex : Regulatory Strategies in the Japanese Colonial Empire, 1895-1945

Chaired by Louise Young, New York University

Whipping the Empire into Shape : Japanese Views of Punishment, Race and Civilization in East Asia, 1895-1912

Daniel V. Botsman, Harvard University

Empire of Welfare : Social Work and Japanese Colonialism, 1918-1945

David R. Ambaras, North Carolina State University

Sexual Management in Colonial Taiwan : Prostitutes, “ Comfort Women ” and the Mothers of the Japanese Race

Eika Tai, North Carolina State University

Discussant : Louise Young, New York University

Sabine Frühstück, University of California, Santa Barbara

以上のようなラインナップを見ても、現在の米国などにおける日本研究者の関心の所在や注目し

ている研究課題などを大まかに知ることができると思います。それは、戦後日本の右翼や民族主義、アジアでの民主化と政党、アジアにおける日米間の関係、アジア経済のブロック化、沖縄や男女間・世代間などでの政治的アイデンティティの形成、基地と女性との関係、組織論についての再考、植民地における刑罰・福祉・性などの問題です。

もちろん、最初にお断りしたように、これは私が参加したものに限られていますので、あくまでも一断面に過ぎません。重なっていたりしたために私は参加できませんでしたが、この他にも次のような興味深いセッションがありました。セッションの論題と報告の表題を挙げておきましょう。これらをみますと、太平洋戦争の評価や歴史認識の問題などについても、大きな関心が寄せられていることが分かります。

34 , Marginal Memories : Lesser-Known Controversies and Collaboration in American and Japanese Remembrances of the Pacific War

Treading the Tiger's Tail : American and Japanese World War Veterans Reconciliation Ceremonies

Revisiting the Pacific War : Japanese and American Critiques of Pearl Harbor Films

Americanizing Japanese War Crimes

56 , Remembering War in Peace : Appropriating Memories Across Borders and Generations

Constructing an Acceptable Past : Postwar Narratives of the Japanese Agricultural Colonist

The Admiral and the Tourist : On Okinawan Battlefield Tourism

Lost Memories, Veiled Ideologies : Yasukuni Shrine and State Shinto, 1869-1945

“ Mother Said She Grew Up with the War ” : A Study of Transgenerational Japanese Memories of the Pacific War

129 , The State Social Elites, and Commoners in the Transition to Modern Nationalism in China, Korea, and Japan

Comparing State Constructions of Social Identity in Late Imperial and Modern China

Understanding Nationalism from the Early Modern Japanese Experience

Wat's in a *Kuk*?

Popular Perceptions of the State in the Late Ch'oson

138 , What's Wrong with Japanese Women : Positionality and the Language of Rescue

Mrs.Mogi's Letter : How to Educate the Occupationnaire

Do Japanese Women Spoil Men?

Resisting and Rescuing the Other Through Learning the Other's Language : A Critical Reading of *Onna Rashiku (Like a Woman)*

139 , Constructing History : Interdisciplinary Perspectives on the Institutionalization of War Memories in Japan and Its Consequences

Projecting East Asia : Japanese Wartime Newsreel Depictions of Daitōa

The Early Postwar Institutionalization of War Memories in Japanese Educational Politic

Selective Memories : Politics, Institutions, and War Memories in Postwar Japan

## 報告と討論についての感想

これらのセッションを聞いて、様々な感想を持ちました。しかし、紙幅も限られていますので、次の3点に限って指摘しておきたいと思います。

第1に、現代日本における「自由主義史観」「修正主義史観」に基づく歴史の見直し、民族主義的な傾向や右傾化に対して、日本で考えられている以上に米国での研究者の関心と警戒心が高いということです。今回の学会でのセッションで、「左翼」ではなく「右翼」が、しかも、11と160の二つのセッションで取り上げられたという事実は、この問題への関心の大きさを示しています。民族主義については、129でも取り上げられています。

しかも、この学会が終わった直後に、従軍慰安婦問題についてのNHK教育テレビの扱いに抗議して、世界の研究者が抗議文を手渡すという事件が起きました。『朝日新聞』3月27日付によれば、米山リサ・カリフォルニア大学準教授が呼びかけ、世界各国の学者・研究者360人がNHKに抗議文を提出したというもので、従軍慰安婦に関する番組が当初の予定と異なったものになったことに抗議する内容です。この呼びかけ人になった、米山準教授は、今回のAASのセッション34でも、従軍慰安婦問題に関連した報告を行っています。

第2に、117と131の二つのセッションで沖縄の基地問題が取り上げられたという点も特徴的でしょう。セッション56では、沖縄戦跡ツアーも取り上げられています。沖縄への注目度の高さも、今回の学会での特徴の一つだったと言えるでしょう。

ただし、私の出なかったセッション56がどうだったかは知りませんが、セッション117と131のいずれも20人内外で、参加者は多くありませんでした。関心は強くても、その広がりはまだまだということなのでしょうか。なお、セッション117の論議の中で、新潟県巻町での住民投票が言及されました。新潟県は私の故郷であり、その町の話をしカゴで聞くとは思いませんでした。

このように、現代日本では、沖縄や巻町での住民投票、長野県知事選や今回の千葉県知事選の結果などに示されているような新しい住民パワーが高まっています。これらは、新たな市民的政治参加の力の現れだと言えるでしょう。現代の日本では、このような市民パワーの高まりと先に指摘したような右傾化の動きとが、同時に生じているわけです。現代日本における、このようなアンビバレントな動向をどう考えたらよいのでしょうか。

第3に、アンビバレントな動向という点で言えば、アジアにおける民主化・ブロック化と日本の民族主義化の矛盾という問題もあります。これも、アジアへの日本の「同化」と「異化」という相反する二つの動向の現れだということになるでしょう。

アジアでは、インドネシアやフィリピンなど、民主化に向けての動きが顕著であり、セッション26は、直接、この問題を扱っていました。開発独裁から民主体制への転換は、アジアの「平準化」

を進め、それは経済的ブロック化の一つの背景にもなっています。

当然、日本もこのような動きに加わっていますが、その時、アジア・太平洋戦争時の植民地支配や侵略戦争、従軍慰安婦問題など、過去の歴史認識の問題が「アジアに刺さった棘」になっています。「自虐史観の見直し」を言う「歴史修正主義」は、この「棘」を抜くのに役立つのでしょうか。それともこの「棘」を、抜き去ることができないまでに肥大化させてしまうのでしょうか。

APECや拡大ASEANなどの地域的国際機構も整備されてきており、アジアにおけるブロック化が進みつつあります。このようなアジアにおける地域的相互関係の深まりのなかで、日本の対応はますます難しくなっています。それに背を向けるように「内向き」になっていく日本のあり方は、いずれ時代への適合性を問われることになるのではないのでしょうか。

### 全体を通じての印象

さて、今回の学会に参加して一番印象に残ったことは、女性研究者の多さです。私は日本政治学会と社会政策学会の研究大会には大体出席しています。このうち、日本政治学会への女性研究者の出席は、極めて少数です。これに比べれば、福祉関係や社会保障などの研究者も加わっている社会政策学会への女性の参加は多くなります。しかし、それでも2割くらいではないのでしょうか。

それに比べて今回の学会への女性参加者は、4割ほどではないかという印象です。セッションの報告者や討論者・司会などとしても、女性が活躍しています。テーマによっては、壇上に並んでいる人のうちで女性の方が多いいということもありました。

私が出席したのは主に政治・経済・社会関係のセッションでしたが、それでもこのような傾向は顕著です。T先生が主に出席した歴史・文化・宗教関係のセッションでは、男女半々くらいの比率だったそうです。これは、米国における学会に共通した傾向なのでしょう。それとも、アジア関係の研究者に特に見られる傾向なのでしょう。

いずれにしても、このようなアカデミックな研究分野で女性の比率が高まり、男女の比率が同じようになってきているということは重要でしょう。これは大変望ましい傾向であり、その最先端をアジア研究学会が進んでいるということの意味しています。

もう一つ、印象的な事実がありました。それは、分野別の参加者の数の傾向です。今回の学会の会場は、シェラトン・ホテル・シカゴの2～4階が使われ、3階が入り口でフロントなどがあります。2階で歴史・文化・宗教関係のセッションが開かれ、政治・経済・社会関係のセッションは4階という形で分かれています。

このような形でセッションの場所を分けたのは、参加者の便宜を考えてのことでしょう。関連する分野のセッションが同じ階で行われていれば、関心のある報告を聞くために複数のセッションを渡り歩くこともできるからです。このため、私は主として4階、T先生は主として2階へと分かれることになりました。全体的に、2階の方の部屋は狭く、4階の方の部屋は大きいという傾向があります。これは、部屋割りを行った大会主催者の予想を反映しています。

しかし、実際の参加者の動向は、このような予想に反するものだったようです。私の出たセッションは、少ない場合で10数人、多い場合でも40人くらいでした。これに比べて、T先生の出たセッションは、たいてい会場が一杯で、時には「立ち見」が出るほどの盛況だったといえます。

一番多かったのは、「キティちゃん」などの現代日本のカルチャーを扱ったセッション（55, Things Japanese, Things Unexpected : Material Culture in Contemporary Japan）で、75人ほどの椅子席は一杯になり、それと同じくらいの「立ち見」がいて、全部で150人ほども参加していたそうです。このような出席状況も、日本研究者の関心の所在を反映しているように思われます。

このように、今回の学会では多くの問題が取り上げられました。しかし、日本についてのセッションは、220のうちの49にすぎません。韓国の15よりは多いとはいえ、中国及び内陸アジアの86に及びません。単純な比較はできませんが、このような数のあり方が、日本に対する関心の弱まりを反映していなければよいのですが……。

関心の弱まりといえは、日本の政治や経済に対する関心は、セッションの設定や報告に関する限り、極めて希薄だったといえるでしょう。セッション117で戦後日本の総選挙や政党の得票状況が取り上げられましたが、それは男女の政党支持状況の違いを分析する手がかりとしてのものでした。セッション54で外務省や通産省などへの言及もありましたが、それは日本の対外政策やアジアへの対応に関連してでした。

日本の政府や官僚組織、政党政治、企業や日本経済の問題を正面から取り上げるセッションはありませんでした。社会運動については、前述のように、沖縄の基地反対運動や巻町の反原発運動が取り上げられましたが、労働組合や労働運動についての報告はまったくありません。

日本の政党政治と労働運動との関係、政治や労働問題を専門にしている私としては、寂しい限りです。まあ、今の日本の政治や労働運動の状況を見れば、良く事情を知っている人ほど論じようとする意欲を失ってしまうのかもしれませんが……。

## 2 ハーバード東アジア協会の研究集会への参加

### 朝8時半から夕方6時まで

ハーバード東アジア協会（HEAS）の研究集会は、4月7日（土曜日）の朝8時半から夕方6時まで、ハーバード大学のクーリッジ・ホールで開かれました。これは、東アジアを研究する大学院生中心の研究会で、全米から大学院生が集まってきます。

クーリッジ・ホールの3階には、私がお世話になっているライシャワー日本研究所があり、その他、フェアバンク中国研究所や朝鮮研究所など東アジア関係の研究所の多くも存在しています。そのような関係もあって、ここが会場に選ばれたのでしょう。

会場のクーリッジ・ホールを入りますと受付があり、ホールには沢山の椅子が並べられていました。ここが、開会の挨拶と「基調講演」の会場になります。受付を済ませますと、朝食の用意がしてあると言います。クーリッジ・ホールの食堂に行ったら、コーヒーやドーナツ、マフィン、果物などが用意されています。自由にとって食べなさいということのようです。

8時30分の予定より15分遅れて、中国法を専攻するハーバード大学のロースクールの先生による「基調講演」が始まりました。これは9時15分までで、その後セミナー・ルームに分かれてセッションが開かれます。

セッション1は9時半から11時15分まで、セッション2は11時半から1時15分までです。さすが

にAASとは違って、その後は昼食時間が1時間設けられています。セッション3は午後2時15分から4時まで、セッション4は4時15分から6時までです。午後6時でセッションは終わり、その後は友人や同じ専門の仲間との交流に当てられるようです。

各セッションは、それぞれ3つの分科会に分かれています。したがって、分科会は全部で12になります。分科会では、3人から5人の報告者が予定されていました。プログラムに記載されている報告者は、45人に上ります。

しかし、この全ての人実際に報告したわけではありません。私の出たところでは、3つのセッションで各一人の報告がありませんでした。それでも、この日一日で13人の報告を聞きました。各セッションでは、教員のコメンテーターがいて、そのコメントも聞きましたから、かなりの密度です。

### 報告の概要と若干のコメント

クーリッジ・ホールのロビーでの「基調講演」が終わって、「どこに出ようかな」と思いながら立ち上がったとき、偶然、ライシャワー日本研究所のゴードン所長と顔を合わせました。挨拶をして話をしながら、一緒にあるセミナールームに入りました。ゴードン所長は、1-Aセッションの司会兼コメンテーターだったのです。一緒に入ったのにまた出ていくというわけにはいきませんので、この分科会に出席することにしました。

このセッションの共通テーマは「戦間期の弁証法的思考」というもので、西田幾多郎などの「京都学派」、吉野作造の植民地論、戸坂潤の唯物論についての報告がありました。このほか、三木清の報告もプログラムには記載されていましたが、実際には行われませんでした。朝早かったということもあって、出席者は数えるほどしかいません。報告者3人と司会、私にあと3～4人ですから、10人に満たない数です。

「京都学派」については、先日のAASでも取り上げられていました。また、戸坂潤や三木清など、戦前の唯物論研究会で活躍した「マルクス主義哲学者」が米国の若手研究者に注目されていることには、ある種の感慨を覚えました。

ワシントン大学のハン（Jung-San N.Han）さんは、植民地主義や経済政策との関連で、吉野作造の民本主義論の限界を指摘する報告（*Becoming of New Liberal: The Case of Yoshino Sakuzo(1878-1933)*）を行い、これについて私は質問しました。吉野を「New Liberal」と特徴付けていることについて、これはどういう意味なのか、どのような意味で「New」なのか、これは植民地主義や帝国主義と親和的なりベラリズムという意味なのかと聞いたわけです。

答えは大体そういうことのように、ハンさんは吉野作造よりも石橋湛山の方を評価していました。しかし、吉野については、朝鮮や中国の反日民族主義運動への理解を呼びかけたとの評価もあり、この点については論争があり得るでしょう。

2時間目のセッションでは、「国際関係」の分科会に出ました。ここでの報告は、中国関係が3本、日本関係が2本、予定されていました。中国関係では、1995～96年における台湾海峡をめぐる米中間の緊張問題、同じく今後10年を見通した台湾周辺の紛争問題、これに関連して、APECを通じての東アジアにおける地域的な安全保障体制構築の問題が取り上げられました。

関連する報告が3本もあり、出席者も多く、この問題についての関心の高さがうかがえます。最初の報告者が、米軍偵察機の海南島への緊急着陸に言及して、「幸か不幸か、most timelyになってしまった」と苦笑していたのが印象的でした。ヨーロッパでは、もはや東西間の緊張は過去のものとなりましたが、東アジアでは現在の問題です。これをどう解決していくかは、米国の研究者にとっても中国からの留学生にとっても、今もなお切実な課題であり続けているということでしょう。

日本関係では、沖縄に対する米国の政策と、北方領土問題など日本の対ロシア政策についての報告が予定されていました。いずれも日本の留学生による報告のようです。しかし、残念ながら、後者の報告はありませんでした。最近、外務省と自民党内では、「4島返還論」と「2島返還論」をめぐる対立が顕在化し、ロシア課長が更迭されるという「事件」が起きました。私はこれについて質問しようと思いましたが、報告がなければ質問することはできません。残念です。

沖縄についてのサエキ（Chizuru Saeki）さんの報告は、今回聞いた中では一番分かり易いものでした。沖縄に対する米国の占領政策についての報告（The US Mission in Okinawa: The US Occupation Policy toward Okinawa in the Cold War Context）は、民主化を掲げた米占領軍の「2面性」を指摘し、本土とは異なった沖縄での米軍の非民主的な干渉を鋭く告発していました。この中で、一つの例としてあげられたのが、1957年の瀬長亀次郎那覇市長の追放問題です。

この時、瀬長市長は米軍の干渉によって那覇市長の座を奪われ、また、65年の琉球立法院選挙でも失格宣言によって議員の身分を剥奪されました。瀬長亀次郎は、沖縄の「祖国復帰」運動で象徴的な役割を果たした人物で、沖縄人民党の党首でもあり、1972年の施政権返還後は日本共産党の副委員長になりました。その人の名を、ここ米国のハーバード大学で聞くとは思いませんでした。

いずれにしても、AASと同様に今回もまた沖縄についての報告があったわけで、米国の日本研究者における沖縄に対する関心の高さが、再び裏付けられたような気がします。ただし、今回の報告者は日本人の女性大学院生で、米国への留学生のようです。

午後の最初のセッション「政治経済」では、AASで知り合ったクリス（Christopher Gerteis）君の報告がありました。彼は、日本の50年代から60年代の労働運動を研究テーマにしており、大原研究所で資料を調査したいという希望を持っています。

クリス君の報告は炭労の主婦組織であった炭婦協の活動についてのもの（Tying together Kitchen and Politics: The Emergence of Women's Labor Activism in Postwar Japan）で、実証的で手堅いという印象でした。しかし、それだけに参加者にはなじみがなく、細かすぎて良く分からなかったようです。それに、分科会の共通テーマとは少しずれていたのかもしれませんが。

このセッションでは、他に3本の報告がありました。いずれも日本以外で、韓国の金泳三政権による経済改革問題、中国の農村から都市への人口流入問題、同じくWTO加入後の中国のグローバリゼーションの問題が取り上げられました。

「政治経済」を共通テーマとする分科会で、日本の50年代の労働運動が取り上げられたものの、日本の「政治経済」を正面から論ずる報告がなかったというのは、残念ではありますが、米国における関心の所在を象徴的に示しているような気がします。韓国や中国の現代の「政治経済」については研究し論ずべき意欲をかき立てられても、現代日本の「政治経済」にはそのような魅力がない

ということなのでしょう。

最後の分科会は「統制された共同体」という共通テーマで、ここでの報告も、中国についてのものが2本です。もう一本予定されていて報告されなかったのも、中国に関するものでした。このように、今回の報告では中国に関するものが目立ちました。それだけ、中国についての関心が高いということでしょうし、また、北京大学や精華大学などの中国の大学を卒業してから米国にやってくる留学生が多いということでもあるでしょう。

ここでの報告は中国国営企業の民営化問題と、中国の国営企業と日本の財閥の比較研究でした。いずれの問題についても私は素人ですが、いくつか疑問を感じました。前者の報告は、三つのケースを挙げて民営化について論じていましたが、そのうちの二つのケースでは、資本構成のうち、国家資金が過半数を超えています。提示された表を見て、「あれれ？」と思いました。

民間資金が導入されてはいますが、60～70%が国家からのものです。これで、どうして「民営化」と言えるのでしょうか。この点についての説明が十分ではなく、これについての質問もありません。それでも「民営化」と言えるとするれば、「国営化」との違いはどこにあるのでしょうか。「民営化」についての定義が曖昧である、ということなのかもしれません。

後者の報告については、もっと大きな疑問を感じました。それは、中国の国有企業体制の「失敗」と日本の財閥体制の「成功」を比較し、その根拠を両国の文化の違いに求めるというものです。これについては、前提と結論の両方に大きな疑問符をつけたくくなります。でもそうすると全否定ということになってしまいますので、黙っていましたけれど……。

コメンテーターも、中国の国有体制は経済成長という点では50年代までは成功したのではないかと、日本の財閥体制は、その遺産である系列化の見直しなどが行われており、必ずしも「成功」とは言えないのではないかなどと指摘していました。私もそう思います。ある制度や体制の「成功」や「失敗」を判断するのは大変難しい問題です。いつの時点で、どのような視点から評価するかによって、「成功」は「失敗」になり、そのまた逆もあり得るからです。

日本の財閥体制についていえば、戦前日本の「富国強兵」策において果たした役割は大きかったかもしれませんが、しかし、その結果として世界を相手にした戦争に突入し、悲惨な敗戦の惨禍に日本を投げ込むことになりました。これは、「成功」だったのでしょうか。それとも「失敗」だったのでしょうか。

戦後、この財閥は解体されましたが、銀行を中心とした系列化を梃子に企業グループとして復活します。この企業グループ体制は戦後の高度成長の推進力になりましたが、今やそのシステム自体が桎梏となり、解体・再編が進んでいます。このような戦後における企業グループ体制は、「成功」したのでしょうか。それとも「失敗」したのでしょうか。

また、同様のことは韓国の財閥体制についても言えるでしょう。報告者は、韓国についてほとんど意識していないようでしたが、日中間の比較を行う場合には、常に韓国を視野に入れておくべきでしょう。特に、「文化」を問題にする場合、日本と中国だけでなく、韓国を比較の対象にすることには大きな意味があると思います。ただし、今回のような問題の場合、「文化」のレベルで問題を論ずることに、そもそも私は賛成できません。

問題は、文化や社会にあるのではなく、政治や経済システムにあると思うからです。中国の国有

企業と日本の財閥を比較して、その違いの根拠を「文化」に求めるのはある種の「逃げ」ではないかというのは、厳しすぎる評価でしょうか。

## むすび

ということで、この日も大変密度の濃い、充実した研究集会を経験させていただきました。米国における若手の東アジア研究者の関心の所在や研究状況を知る上で、大変有益だったと思います。

報告の詰め込みや短い時間での報告にも慣れてきました。というよりも、このような形で一カ所に詰め込んで、短い報告を矢継ぎ早に行い、集中した討議を行うというやり方には、短時間で効率的に集中して研究交流を行うことへの意気込みといえますか、執念のようなものを感じました。

しかも、今回の集会は大学院生が自分たちで準備し、要員も院生で分担してやったようです。もちろん、そのための資金は大学から出ているのでしょう。お陰で、私も朝食と昼食をご馳走になりました。このような大学院生の自主的な研究交流と大学や教員によるバックアップ体制は、日本でもあるのでしょうか。私の出た法政大学の社会学専攻では、専攻レベルでの小規模な研究交流集会がありました。全国レベルでの共通の研究テーマでの大学院生の研究交流集会はありませんでした。

もし、AASが学会にあたるのであれば、それは日本でもあります。しかし、今回のような院生レベルでの研究交流集会は今でもないように思います。これは大変有益です。日本でも、大学院クラスの若手主体の研究交流集会を考えたらどうでしょうか。

それに、今回もまた、AASに参加したときと同様の感想を持ちました。その一つは、女性の活躍です。集会の受付、最初の司会、開会の挨拶などは、全て女性の院生でした。参加者の数では男性の方が多いようでしたが、報告者や司会、コメンテーターとしても、日本に比べればずっと女性が目立ちます。

もう一つの点は、現代日本の政治・経済への関心の薄さです。戦後の日本に関連する報告は、米国の沖縄占領政策、北方領土問題についての外交政策（報告なし）、50年代の労働運動についてのもの、いずれも、日本の政治・経済を真正面から扱ったものではありません。私などの専門からすれば、あまり関連するところがなく、どこに出ようかと迷うほどでした。結局、最後は中国についての報告を聞きましたが、できれば、現代日本の問題を正面から扱った報告を聞きたかったと思います。

二つの学術集会を通じて、私が感じた共通した関心あるいはコンセプトを端的に指摘すれば、それは歴史認識と民族主義・右翼、沖縄、女性であるように思われます。もし、学術的関心や研究課題に「流行」というものがあるとすれば、今の米国における日本研究の「流行」は、これらの課題であるように思われます。ただし、これも、あくまでも「一断面」をかいま見た私の個人的な感想にすぎませんが……。

（いがらし・じん 法政大学大原社会問題研究所教授，  
米ハーバード大学ライシャワー日本研究所にて海外研修中）